



ミード社会理論の基本命題について

著者	越井 郁朗
引用	人間科学論集. 1985, 17, p.57-65
URL	http://doi.org/10.24729/00004777

ミード社会理論の基本命題について

越 井 郁 朗

I

G. H. ミードの社会理論は、人間と社会との動的関係を、行為の概念を軸として深く徹底して分析しているが、それは次のような三つの基本的命題によって特徴づけられている。

第1は、彼の最も有名な社会的自我論に直接かかわる命題で「人間は社会的存在であるが故に、理性的存在である。」⁽¹⁾ というものである。この命題は彼の社会心理学を展開した主著「精神・自我・社会」の中心テーマでもある。

この命題は二重の意味を含んでいる。一つには、理性・精神・目的的行為、自我などの人間の特徴は、最初から人間に備わったものではなく、すべて社会的経験の結果であり、社会過程の産物であって、人間の一切は社会的である。その意味で、経験的にも、また論理的にも「社会は個人に先行している。」⁽²⁾ として、個人に対する社会の先在と、人間の徹底した社会性を強調している。

もう一方では、社会的所産として社会的経験を通して理性・精神・自我を獲得した人間は、能動的で創造的な行為者として社会に対して自律的で能動的な役割を果たしうるという能動的人間観を主張し、人間の自由・能動性の源泉が社会外的要因に求められるのではなく、社会過程そのもののうちにあることを指摘している。

第2の命題は、行為に関するもので、行為は、行為者とその環境との動的関係を示す「存在の単位 unit of existence」⁽³⁾ である。という命題である。

これは、人間の存在証明はまさに行為することにより、また社会の本質も行

為にあることを示している。行為は人間と社会の存在の単位であるだけでなく、行為の主体である人間と、行為の交換から成る社会を考察するための分析の基本的単位でもある。そして行為は、目標志向的な動的な社会過程であって、能動的で創造的な活動であることを示している。

このような行為の観点は、「精神・自我・社会」においても貫かれているが、中心的に論じられているのは「行為の哲学」においてである。彼の社会的自我の定義も、この行為論の枠組の中に位置づけることによって、正確に把握することが可能である。

第3の命題は、時間的世界に関するもので、「存在の实在性 reality of existence は現在にある。」⁽⁴⁾ という命題である。

行為は、過去—現在—未来へと展開する動的進行過程であるが、現在にこそ实在性があり、その意味で現在は、实在性の位座 locus of reality である。過ぎ去った過去の出来事や、既に消滅した事柄、そして未だ実現していない未来の出来事、或いは空想上、想像上の出来事は、いずれも現在の行為の状況、或いは行為の対象を構成する要素・条件である。現在進行中の活動、行為の他に实在性は存在しない。対象の实在性は、現在の行為によって保証される。

この現在という世界は、絶え間のない生成と消滅、運動と変容の過程にあり、各々の現在の行為によって次々と生み出される事象 event が世界を構成する。その意味で「世界は生成事象 event の世界である。」⁽⁵⁾ 社会的世界は、従って、固定し安定した構造ではなく、矛盾対立や葛藤を含む流動的過程であり、異質な要素、新奇なものが出現する創発性 emergence の世界である。この時間性に関する命題は「現在の哲学」の中心的テーマでもある。

これまでミードの社会理論を論ずる時、そこで取り上げられたのは第1の命題である社会的自我論に関するものがほとんどで、第2、第3の命題については論及されることがあまりにも少なかった。以下これら3つの命題について若干考察してみたい。

II

「人間は社会的存在であるが故に、理性的存在である。」という第1の命題に関連して、彼の社会的自我論はその社会理論の中核とされ、ミードについて論じるといえば、大半が社会的自我、役割取得、一般化された他者などの概念をめぐって展開されて来た。しかもそれは二つの正反対の解釈或いは意味づけで論じられて来た。

それは一方ではこの命題の前半、即ち、社会的存在の側面に焦点をあて、社会規範や役割期待がいかにして内面化されるかという問題、つまり社会化のメカニズムの解明という観点から取り上げられて来た。ミード理論が人間の社会性を強調している故に、A. ストラウスも指摘するように、専ら社会的規制の個人内への移入のメカニズムの理論として利用されて来たといえよう。⁽⁶⁾

そこでは、T. パーソンズや R. K. マートンらの構造一機能主義の社会学者達のように、役割取得の概念を、社会的役割期待の内面化の観点からのみ捉え、また、一般化された他者の概念も、準拠集団の別名のごとくに扱われている。また、社会的自我の概念についても、その能動的な側面“I”の意義は十分に評価されず、むしろあいまいな残余概念として深く追求されることなく放置されることが多かった。そして、社会的役割関係の構造の反映である受動的な自我の側面“me”のみが重視されて来たといえよう。このようなミード理論の解釈は、人間を社会的役割期待の受動的遂行者、つまり D. H. ロングの批判した「社会化過剰の人間観」*over-socialized conception of man*⁽⁷⁾ に立つものとして扱い、ミードを、社会決定論者であるかの如くに解釈するものと云えよう。

実際、ミードがわが国へ紹介された当時、ミードは、全体主義の理論家か社会決定論者であるかのように扱われたことがあった。「精神・自我・社会」の本邦初訳は「行動主義心理学」(三隅一成訳 昭和15年 白揚社)であるが、これは当時の太平洋戦争前夜という時代の傾向を象徴する「世界全体主義大

系」(全12巻)の中の1巻として発刊されたものである。⁽⁸⁾この大系には、ファシズムやナチス思想の指導者や共鳴者として知られる A. ローゼンバーグ、F. v. ゴットル、C. シュミット、O. シュパンや、B. ムッソリーニ、G. ジェンティルなどの著作が含まれている。彼らは、「全体は部分に先行する」という基本命題の下に、個人に対する社会の優先性を強調し、個人の自主性、独立性を否定し、ゴットルなどに代表されるように、社会構成体の超個人性を力説する。鶴見俊輔によれば、イタリア、ムッソリーニ政権の文部大臣として、またファシズムの代表的哲学者として知られるジェンティルの自我の社会性の理論は、ミードの社会的自我論と酷似しているものとして扱われた。⁽⁹⁾ジェンティルは、自我がその発生と発展の全過程において社会性に浸透されていることを説き、個人主義を排撃し社会による個人の自由の制限を正当化していた。

確かに、行為の能動性・創造性を主張するミードの社会理論は、そのどこにも全体主義、ファシズムへの接近を示す要素は認められない。けれども、このことは、ミード理論を一面的に社会の優先性を主張する理論、社会規範或いは社会統制の内面化の理論としてのみ捉える時、どういう運命に遭遇するであろうかを暗示しているように思われる。

上の社会的規定の面だけを一方的に強調する見方とは対照的に、先の命題の後半、理性的存在の側面を強調する見解が、H. ブルーマーらによって主張されている。ブルーマーは、シンボリック相互作用論の創唱者であるが、ミードをその先駆者として位置づける。ここでは自我は、自由で自発的で能動的な行為主体であって、シンボル操作を通じて現状を変革する積極的な存在とされる。従来ともすれば影の簿かった“*I*”を重視し、そこに能動性の源泉を求める。そして、自我における“*I*”と“*me*”の内的相互作用の過程を、解釈過程 *interpretative process* という主観的な意味解釈の過程に還元してしまう。⁽¹⁰⁾

しかし、自我の自由・能動性の根拠を、シンボル操作或いは解釈過程という主観的レベルでの処理に還元する見解は、ミードから得たものというより、C. H. クーリーから引き継いだものというべきであろう。クーリーは、人間を精

神的存在として想像作用のうちに捉えただけではなく、社会を精神の交流する場として、大いなる精神 larger mind として規定した。従って社会を把握する方法も、彼にとっては共感的内省法 sympathetic introspection にほかならなる⁽¹¹⁾。このようなシンボル化過剰の見解は、古代ギリシャのソフィストのプロタゴラスの「人間は万物の尺度である」という、唯我論の見方に陥る危険性を多分にはらんでいる。それはミードの先の命題を、「人間は理性的存在であるが故に、社会的存在である」というように、逆転させて解釈したものと云えよう。

このように一方は、社会決定論的に社会的存在の面のみを強調し、他方は自由で能動的な理性的存在の面のみを力説するが、どちらも一面的である。ミードが目指したのは、人間と社会の動的関係の把握であり、主観—客観の分裂を回避し、両者を統一的に理解することにあつた。その為の方法論的立場が、ミード独自の社会行動主義 social behaviorism である。ブルーマーによって、シンボルの相互作用論はミードの継承発展だとされたけれども、恐らく、ミードとブルーマーのシンボルの相互作用論との間で最も大きく異なるのは、この方法論的立場であろう。ブルーマーの解釈的方法は、主観的推測に傾斜しやすく、むしろクーリーの共感的内省法に最も近い。

III

社会過程は、精神・自我・理性が出現する母胎であるが、それを科学的客観的に考察する方法が、ミードの社会行動主義で、それはまず、J. B. ワトソンの機械論的な S—R 理論に基づく行動主義 behaviorism の批判の上に立っている。

ワトソンは、人間の行動の純粋に客観的で科学的な分析方法として行動主義を唱えた。「行動主義者が考えているような心理学は、自然科学の純粋に客観的、実験的な⁽¹²⁾一部門である。」彼は、意識・思考・意志・観念・心像・精神な

ど、一切の人間の主観的な経験を、心理学の研究対象から排除し、外部から観察される行動に限定した。そして、主観的で恣意的な推測を生み易い内省法を否定し、人間の行動を外部から客観的に観察可能で測定可能な刺激—反応の系列に還元して分析する。どのように複雑な行動も、条件反応による習慣形成として説明され、究極的には単純な条件情動反応に分解される。

こうして、行動主義は人間の行動に関心を集中する自然科学とされ、行動についての事実を集め、データを実証し、論理と数学を用いて分析する。人間の行動に、動物の行動の研究と同一の種類 of 操作と、同一の記述用語を適用する。人間と動物との間に基本的差異はなく、量的な差異が認められるだけである。人間は、生理的・化学的・物理的諸要因が複雑にからみ合った機械、即ち細胞・組織・器管などの諸部分から編成された人間機械である。

このような徹底した人間機械論による精神・意識などの内的経験の否定の対極に、ミードの社会行動主義は位置している。ミードは、人間の行動から意識・精神を排除するのは不合理であり、また、外部から直接観察しえない内的経験に対して、客観的に行動の面から接近可能であることを主張した。精神・意識・自我などは、ワトソンが仮定したような心的実体ではなく、機能・過程である。それは名詞的なものではなく、動詞的なものとして、即ち「もの」ではなく「こと」として捉えられるべきものである。精神や自我は、それを含まない社会的相互作用の過程から生じる社会的所産である。そして内的精神の過程は、外的活動のうちに表現されている。外部から観察しうる行動は、内的行動の部分であり、個人の内部に起った過程の表現であり、外的行動は内的過程と連続している。食事のために食卓に向う人は、食器をとり箸を持つ準備をしているように、外的行動は、その行動の開始或いは初期段階としてその背後に、内的行為或いは準備段階としての態度をもっている。行為は対象に向う一連の動的過程であり進行過程であるから、行為の後期の段階は、初期の段階のうちに準備されている。その方法はいわば、内から外へと向うのではなく、外から内へと向う方法である。

この社会行動主義の方法論的立場を特徴づけるのは、次のような諸点である。

1. 社会や行為、自我や精神を過程のうちに捉える機能的観点である。特に、意識・精神の存在を否定するワトソンは、意識・精神を物体 substance、或いは、心的実体 *psychical entity* として考えたが、精神や自我・意識は「もの」ではなく、「こと」であり、働き・作用ないし機能であって、動的過程において把握すべきものである。

2. 客観的相対主義 *objective relativism* の観点に立っている。個人の意識・精神・自我は、個人にのみ接近可能であるという意味では私的経験である。しかしそれは人々との接触・社会的相互作用によって相互滲透・相互理解が可能であり、社会共有的経験によって基礎づけられている。個人の観点は、他者と共有することによって客観的となる。

3. 発生史的視点 *genetic perspective* に立つ。精神・意識の存在を最初から仮定して、社会過程を分析するのではなく、原初的なより低次の行動の段階から出発して、複雑な過程へと進める。精神・自我のない社会は存在するけれども、その逆はありえない。創発的進化 *emergent evolution* が、ミードの社会の発展過程についての基本的枠組であった。

4. 自然主義 *naturalism* の立場から、客観的経験的に説明できない超越的神秘的な要因を一切前提としない。「疑う自我」というデカルト的な先験的自我の仮定を認めない。その意味で、社会的事実の説明に際して、神秘主義的な形而上学的な力に還元することを拒否して、経験的に普遍妥当する因果律の適用をすすめるデュルケームの自然主義と極めて近い。⁶⁴⁾

(以下次号)

- (1) G. H. Mead, *Mind Self, and Society*, 1934, Univ. of Chicago Pr., p. 379. (以下 MSS. と略記する。)
- (2) MSS. p. 7.
- (3) Mead, *The Philosophy of the Act*, 1938, Univ. of Chicago Pr., p. 65. (以下 PA. と略記する。)
- (4) Mead, *The Philosophy of the Present*, 1932, Open Court, p. 1. (以下 PP. と略記する。)
- (5) PP. p. 1.
- (6) A. Strauss, Introduction, in G. H. Mead *On Social Psychology*, 1964, Univ. of Chicago Pr., ed. by Strauss.
- (7) D. H. Wrong, "The Oversocialized Conception of Man in Modern Sociology," *ASR*. 26 (April, 1961) pp. 183.
- (8) 「世界全体主義大系」全12巻 白楊社刊は、次のような構成である。
 - A. ローゼンバーク「ナチスの基礎」
 - F. v. ゴットル「民族・国家・経済・法律」
 - E. フーバー「ナチス憲法論」
 - C. シュミット「国家・議会・法律」
 - O. シュパン「社会哲学」
 - A. ミューラー「協同体の精神」
 - B. ムッソリーニ「協同体国家」
 - G. ジュンティル「純粹行動の哲学」
 - V. パレト「社会学大綱」
 - W. リップマン「自由全体主義」
 - T. ヴェブレン「アメリカ資本主義批判」
 - G. ミード「行動主義心理学」
- (9) 鶴見俊輔「新版アメリカ哲学」1971年 社会思想社 119～120頁。
- (10) H. Blumer, *Symbolic Interactionism*, 1969, Prentice-Hall.
- (11) C. H. Cooley, *Social Organization*, 1909, Charles Scribner's Sons.
- (12) MSS. pp. 2.
- (13) J. B. Watson, *Behaviorism*, rev. ed. 1930, 「行動主義の心理学」安田一郎訳 1980年 河出書房新社 381頁。
- (14) E. Durkheim, *Les Règles de la Méthode Sociologique*, 1895, 「社会学的方法の規準」宮島喬訳 1978年 岩波書店 261頁。

On the Basic Maxima of Mead's Social Theory

Ikuo Koshii

There are 3 basic maxima in the social theory of G. H. Mead. The first is concerning his conception of social self, the second is about the act, and the third is a frame of time. This paper will examine the significance of these maxima.